

本日の学び テーマ:「キリストが形づくられるまで」 テキスト:ガラテヤ4章8-20節

【理解の手がかりとして】

パウロは非常に理論的な人であった。彼の書いた手紙で代表的なローマの信徒への手紙などは非常に論理的で系統立った著述である。一方パウロは「情熱」豊かな人である。論理的かつ情熱的な人、これが私のパウロの印象。ガラテヤ書を読むと著者パウロの感情を感じずにはいられない。文字に込められたパウロの体温、その感情の熱さ、怒りを感じる。その怒りはガラテヤの信徒に対する心配から出た怒り。愛の表れとしての怒りである。

パウロは、ガラテヤの信徒たちと福音宣教（伝道）の苦楽を共にした経験を思い浮かべながらこの手紙を書いている。その忍耐した経験が「無駄になったのではないか」(4:11)と心配している。その心配の理由が9節にある。「あの無力で頼りにならない支配する諸霊の下に逆戻りし、もう一度改めて奴隷として仕えようとしている」という事態である。

ガラテヤの人たちはパウロの福音宣教によってイエス・キリストに出会い、そして信じ、キリスト信徒となった。しかしこの時、その福音から引き離される危機に面していた。それは同時に、それまで頼りとしていたこの世の力に頼る状態に舞い戻り、かつての「古い人」(コロサイ3:9)のようになろうとしている、その危機に直面していたのである。

ガラテヤの人たちは、パウロを通してイエス・キリストの福音によって現された「まことの神」を知らされた。この「まことの神」をもう少し厳密に言えば、「キリストの十字架と復活の出来事において啓示された神」にほかならない。ヨハネの福音書にこうある。「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである」(ヨハネ1:18)と。そう、イエス・キリストによって啓示された「まことの神」こそ、私たちが世の諸霊(わたしたちを支配し、罪の中に閉じ込める内外的な力)から解放し、その魂を自由にしてくださる。

10節に「あなたがたは、いろいろな日、月、時節、年などを守っています」とある。ガラテヤの人たちは、せっかくパウロから聞いた福音によってキリストによる解放された新しい生活に生きる喜びを味わっていたのに、またそれから離れて世の言い伝え、迷信に舞い戻ろうとしていた、そう文字通り「迷いの中」にあったわけである。パウロの「心配」(4:11)の種はそこにあった。

そこでパウロは「お願い」(4:12)する。切なる要求である。彼らの心に迫るように訴える。「あなたがたもわたしのようになってください」(同)と。ここでパウロは決して、自分を過大評価して、「わたしを見倣え」と言っているのではない。むしろ反対。パウロはここで自らの弱さを披瀝している。13節に「この前わたしは、体が弱くなったことをきっかけで、あなたがたに福音を告げ知らせました」とあるように、パウロは自らの弱さを通してこそ福音が証しされることを身にしみて経験していた。第二コリント書で、パウロは「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」(2コリント12:9)という主の言葉に基づいて、「だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう」(同)と言っている。

パウロがガラテヤに行ったのは、静養が目的であったのかもしれない、と言う人もいる。おそらく、彼は目に何らかの疾患を抱えていたのだろう。同じく第二コリント書で、パウロは「一つのとげ」と

その身体的弱さを表現しているが、抜きたくても抜けないとげのような痛みを彼は抱えていた。しかしガラテヤの人たちは、その弱さを持つパウロに誠意を示し、慕い、「キリスト・イエスででもあるかのように、受け入れ」(4:14) たのだった。この交わりの豊かさ、良い思い出がパウロの念頭にあった。そのことをパウロははっきり覚えていた。

しかしパウロにとって、自分がどう思われるか、ということは第二、第三のことであつたに違いない。彼はキリストの使徒。キリストの福音を伝えることが彼の生き甲斐。そしてキリストを信じ、キリストにつながる(まことの神につながる)人々が起こされることが何よりの願い。

15節でパウロは「あなたがたが味わっていた幸福は、いったいどこへ行ってしまったのか」と嘆いている。その幸福とは「キリストにある幸福」である。ある人がこう書いていた。「キリスト者である幸福感が薄らいでいかないように、忘れてしまわないように、絶えず、毎日、思い出すことが大切です。朝ごとに、生けるイエス様とお会いし、交わり、イエス様が共にいてくださる喜びと感謝と幸福感を新たにさせていただきます。これが一番大切なことです」(村瀬俊夫)と。

「キリストがあなたがたのうちに形づくられる」——これは、キリストによって啓示された「まことの神」への信仰が、確固たる存在として私たちの内に形成されること。パウロは言う。「わたしの子供たち、キリストがあなたがたの内に形づくられるまで、わたしは、もう一度あなたがたを産もうと苦しんでいます」(4:19)と。

「キリスト者である幸福感」「キリストの内住」、あるいは「信仰復興(再燃)」といったテーマで考え、分かち合ってもよいだろう。

【聖書教育より】

「ガラテヤの教会を思うパウロの姿に、教会を愛するとはどういうことかを考えます。」(大人クラス) ~「教会を愛する」ということをテーマに分かち合ってもよいだろう。